

### 3 ふんわりクロス

## ふんわりクロス

\*\*\*\*\*

「はいっ—！」

かけ声と一緒に、ぼーん、っとボールが飛ぶ。

そして、バシッ、って音。ラクロスのラケット——  
クロスでボールを受けた音。

「はいっ—！」

またかけ声。そして、ぼーん、ってボールが飛ぶ。

でも、今度は音がしない。空に舞ったクロスが、ふわっとボールを受けとめてた。

クロスの影では、栗色のショートヘアが揺れてる。

わたしがボールだったら、やっぱり、なぎさに受けとめてほしいな

\*\*\*\*\*

ふえ〜、暑いなあ。

夏休みが終わればすぐに秋の対校試合シーズンだから、そろそろ厳しくなるのはしかたないんだけど。でもなく、パス練習だけでこんな汗かいちゃうのって、やっぱりキツいわ。

ぐてつとしながら、志穂たちとグラウンドの脇へ。ほんとはみんなと一緒に、テントやビーチパラソルの下で休みたいんだけどなあ。

「なぎさ、お疲れさま」

芝生に腰を下ろそうとしたところで、上から声をかけられた。

いつも聞いているけど、ここでは珍しい声。

「はい、タオルとドリンク」

見上げたら、ほのかがなにか差し出していた。汗が目に入って、あんまよく見えないんだけど。

まあ、いいわ。あたしは、多分タオルだろう、って

方を左手で広げて、顔を拭いた。その間に、右手にはコップみたいなのが押し込まれてくる。冷たいから、こっちがドリンクだね。

「サンキュ。ん」

そう言いながら、コップの中身を一口飲んだところで、なにかへんだな、って思った。たしか、今日って

「ほのか、今日は化学部あつたんでしょ？もう終わり？」

ミントの匂いがするタオル、気持ちいいから目の上にかけたまま聞いてみた。ぼんやり見える影が、なんだか横に首振ってるみたい。

「うっん。まだ部活の最中よ。ちゃんとそこに成果もあるし」

成果？なんだか、イヤな予感がするな。もう一口飲んでるとこだけど、そおつとタオルをどかして見てみたら え!?

「ピーカーあ？」

って、ことは。つまり

「ええ。化学部特製のスポーツドリンク♡」  
ぶはっ！

やつぱりかあ〜っつ！！

「だから、人を実験台にしないで、ってはー」

ああ、くすくす笑ってるよ。もっ。

「冗談。ごめんね。それは市販のをピーカーにあげただけ。化学部で作ったのは、こっちよ」

っていつて、目の前にもうひとつ、ピーカー出てきた。親指と人さし指でつまめるくらいの、ちっちゃなの。

よく見たら、ほのかの後ろに大きなペットボトルが並んでる。はあ。しょうがないなあ。

「志穂お、これ、ほのかから差し入れたって」

あたしは、そのペットボトルつかんで、志穂に渡した。

「はいはいはい　って、全部う？なぎさの分は？」

5 ふんわりクロス

手を振ってごまかしてから、ほのかに向き直ってと。タオルと引き換えに小さなビーカー受け取って、

「もう あたし以外に飲ますんじゃないわよ？」

そのままくいと飲み干すと、あたしはビーカー返して、さっさとグラウンドに戻ってった。ここにいると、またあの子が来ちゃうからね。

ほのかの答え、聞きそびれちゃったけど、まあいいか。聞かなくてもわかるから。

ちよつとテレ笑いしながら、きつとこつ言つんだ。

「 うん♡」って。

\*\*\*\*\*

なぎさがグラウンドに戻ってしばらくしたら、今度はチームに分かれて練習試合。

わたしは、そのままの場所で観戦してた。まあ、実験中でもあるし、ね。

「ほあら！ そっち、行ったよっ！」

「はい、なぎさっ！」

「よあし、せやっ!!」

シユートが決まると同時に、黄色い声上がる。いつもながら、すごいわね、なぎさ。

声の元は、グラウンドをはさんで反対側。両手でメガホン持つてる、大きな女の子。だけど いままで、夏休み中よね。こんな熱心なファンがいたなんて、知らなかったわ。

「ね、ね、ね、ほのかちゃん」

下のほうで声があった。目線を下げたら、クロスを肩に乗せた志穂ちゃんが、こつちを見上げてる。

「やつぱり、気になる？ 気になる？」

地面に立てたクロスに顔を乗せて、わくわくした目でわたしを見つめてる わたしって、そんなにやきもち焼きに見えるのかしら？

「夏休み前の対校試合で、なぎさが大活躍したの、学校新聞に載ったでしょ。あれでファンになっちゃった

らしいの」

後ろから莉奈ちゃん。今回は、なぎさと別のチームなのね。

学校新聞が ああ、思い出したわ。なぎさがシュート決めた写真、ポスターみたいに張り出されていたものね。たしかに、かっこよかった♡

「あたしより大きいけど、1年なんだよね。小学校でバスケやってた子なんだって」

「でさでさでさ、キャプテンが、部に入れちゃえて言つて、なぎさけしかけてるの。邪険じやけんにもできなくて、ずくっと逃げ回ってるみたいだよ」

そっか。だからさつきも、テントと反対側のこっちで休んでいたんだわ。運動部も、結構いろいろあるのね。

「でもでもでも、あたしは反たあいー!」

「あたしも。『差し入れて〜す』とか言っちゃって、粉っぽい手作り菓子とか持つてくんのよ。こっちはのど渴いてるつてのにさ」

ふたりがこんなに嫌がるのつて、初めて見るわ。

よっぽど色々やられたみたい。

「あれはさ、ラクロスじゃなくつて、なぎさに興味あるだけだよ」

「そうそうそう。ちよつと練習さそつてもさ、シュートじゃなきややらな〜い、つて。ヤな感じ!」

そつね。志穂ちゃんの言つこと、わたしにもちよつとはわかる。ラクロスつて、息が合わないとできない球技みたいだから。

「なぎさ、大丈夫かしら」

「キャプテン命令だもんねえ あきらめるまで、待つしかないかなあ」

莉奈ちゃんの言葉、とつても重かつた。

\*\*\*\*\*

はあ。つつかれたあ。

暑いからつてもあるけど、やっぱりあの声がねえ。

7 ふんわりクロス

部の練習試合で、あたしだけ応援されても困っちゃ  
うじゃない。

まあ、とりあえずちょっと休もつか。また、あの子  
と反対側の方に

「もてもてね、なぎさ?」

もうちょっとで、あたしは飛び上がるところだった。

この声、ほのか!?

「な、なに? まだいたの?」

見上げたら、ほのかが頬をふくらませて立ってた。

「ひどいわ。待ってたのに」

あっちゃあ。一瞬あの子かと思ってたから、つい口  
に出ちゃったよ。

「あはは、ごめん。ほら、暑いんだから、理科室で  
待ってればいいのにな、って」

うわあ。顔が引きつっちゃう。ちょっとは機嫌なお  
して っ、って、あれ? にっこりしてる?!

「それはね ちよっと、実験を兼ねて、ね」

実験? あ、そっいえば、この前は服に扇風機仕込

んだりしてたっけ。

「また、スカートに扇風機入ってる、とか言わない  
よね?」

言いながら、ほのかの体をじろっと眺める。前み  
たいに、ブラウスはパタパタ動いてないな。よし。

「まさか」

そうよね。ほのかも、やっとわかってくれ

「あれは移動には不便なもの。今はね、水冷制服なの」  
え??

よくよく見たら、ほのかの制服がキラキラ光って

る。細い 透明な管?

「ね、これだと、校舎の外でも使えるのよ♡」

あ、あ、あのねえ っ!!

「そんなパワーアップ、しなくていいってばっ!!」

ああ、まわりの湿気で、ブラウスが透すけちゃってる  
じゃない。

「もう、これじゃ下まで透けちゃうよ! 　ほら、

ちよっとこれはおって」

ちようどジャーシ持ってきててよかったよ。じゃ、ちよつとがぶせて、と。

きゃあああっ！

いきなり、すつこい声。なに、いったい？

「なぎさ先ばあい、わたしにもジャーシかけてくださいー」

うあー！グラウンド回りこんで、あの子が走ってくるよ。コートは他のグループが試合中だし、しょうがない。いくか！

「ほのか、部室に替<sup>か</sup>えのブラウスあるから、着がえてて」

言いながら、あたしは部室と反対方向に走り出した。

「なぎさは？」

背中にほのかの声がする。もちよつと話してたかったけど、いいや、ダッシュの練習だと思えば。

「あたしは、逃げるっっ!!」

\*\*\*\*\*

なぎさのロッカーは、部室の真ん中くらいにある。きれいに畳んである制服をカゴごとどかすと、その下に袋に入ったブラウス。前に来たときに、大体の場所は調べてあったりするのよね。

もっとも、なぎさもそのことは知ってたみたいだけど。

水冷ブラウスから普通のに着替えて、グラウンドに戻ってきたけど、なぎさはまだいない。どこまで行っちゃったのかしら？

そう思ってたら、

「ほのかああー」

って、情けない声。なにかしら え!?

一瞬、わたしは目の前がまっしろになった。だつて、だつて

「し、鹿!？」

わたしくらい大きな鹿が、わたしに向かって走っ

9 ふんわりクロス

てくるわ。それも立って って、二本足？

「ほのの〜かあああ〜」

え？「この声 なぎさっ？」

「なにやってるの？ 鹿さん？」

わたしの目の前で息切らしてる大鹿の背中なでてあげたら、頭の下からなぎさの顔が出てきた。

「し〜か〜じゃないってえ〜！ かむぞあ〜っ!!」

うふふふ。

「はいはい。甘嚙あまがみくらいなら、かまわないわ」

「がるるるるうっ〜!!」

それじゃ犬でしょ。まったく。

「う〜っ!〜 どうせ、鹿にしか見えないわよ」

あら？ ぷい、って横回いちゃった。

よく見たら、ツノがちよつとちがうみたい。手の

ひらみたいな大きなツノ。これって、

「ひよつとして、トナカイ？」

「いいよ、もう。鹿で」

そういえば、鼻が赤く塗られてるわ。クリスマス用のパーティー衣装ね。

「それで、なんでこんな格好で走ってるの？ この暑い中」

「一応聞いてはみたけど、理由なんて決まってるわね。ああ、泣きそくな顔しちゃって。」

「ちよつと助けてよ、ほのかあ!!」

ふう。そうね、それじゃあ

\*\*\*\*\*

ほのかに言われたとおり、鹿の着ぐるみぬいで背中に隠れたけど、これじゃ見つけてくれって言ってるみたいなものじゃない。

ほのか、なに考えてるんだらう？

「あ、なぎさ先輩の友だちのひとですよね？ こっちに、鹿の着ぐるみが来ませんでした？」

うあ、来た!

「いいえ、見てないわ」

ほのかつてば、よく平気だなあ。あたしはほとんど丸見えだっていうのに。

「その後ろにいるのは？」

「なぎさだけど？」

一瞬、ふたりとも黙っちゃった。そつと覗いてみたら、口をぼっかり開けてこつち見てるよ。

「来てるじゃないですか！」

「わたしは、鹿なんか来てないって言ったの。聞こえなかった？」

うわあ、聞いてて言葉が痛いよ。ほのか、ひよつとして怒ってる？

「じゃ、訂正します。なぎさ先輩を、返してく」

「イヤです」

ピシッ、ってガラスの割れる音が聞こえてきそうなくらい。めつたに聞かない、ほのかの冷たい声。

あたしは、ほのかの背中から出て横に並んだ。ほのかが本気で怒ってるのに、影になんて隠れてられ

ないもん。

「先輩♡ ぼく、ラクロス部にスカウトされてるんですよね？ その先輩より優先ですよね？」

あゝ、イヤだ。この、チャホヤが当たり前っていう感じ。キャプテンの命令じゃなきゃ、絶対無視してやるのに！

「志穂ちゃ 久保田さんからも聞いてるわよ。パスの練習もしないで、なぎさばかり追い掛け回してる、って」

言えないあたしの代わりに、ほのかが言ってくれる。思わず、肩なでちゃうよ。もう。

「わかりもしないくせに!!」

なぎさ先輩のボールは、受けるだけだつて大変なの！ そんなスゴイ先輩に教えてもらつて何がわるいつていうの？ シロウトが口出さないで!!」

——ダメ。もう、限界かも。いくらキャプテンの命令だからって、ほのかをこれ以上バカにするんならつ !!



ふふふ

怒鳴ってやるう、って大口あけたあたしを、笑い声が止めた。 ほのか、なに？

「ふふふ。たしかにわたしは素人だけど、なぎさのボールだったら受けられるわよ？」

「ええっ!？」

思わず、あの子と目を合わせちゃったじゃない。ほのかバカにする気はないけど、だけど

「うそだと思っなら、やってみましようか？」

\*\*\*\*\*

部室の前の通路に、ボールが舞っていた。

両端にあたしと、予備のクロス持ったほのか。簡単な使い方は前ちよつと教えたことがあったけど

「ねえ、ほのかっ！」

あたしがボールを軽く投げる。ほのかはクロスの

枠になんとか当てて、手で取った。

「なあ にっ！」

そのまま投げ返してきたボールは、あたしの頭の上。ひよいつと受けて、また投げる。

「なんか変なこと 考えてっ！ ない？」

今度のボールは、枠の内側で跳ねた。もうちよつとなんだけど。

「いいえ、ぜんっ！ ぜん」

投げ返されたボールは、さっきよりちよつと下。力がないから受けるのは簡単だな。

それにしても、あの子。ケラケラ笑いながら『ちやんと振って』とか『腰が入ってない』とか。シロウトに向かつて、ねえ。

あゝあ、あーいのが一番恥ずかしいってのに、わっかんないかなあ、もう。

あたしはもう一度、軽めに投げてみた。 ふう。

今度はちゃんと受けたみたい。

「うん。じゃあ、今度は本気で投げてっ！」

投げ帰されたボールをクロスの中跳ねさせながら、あたしはちよつと考えちゃった。いまのくらいなら受けられるだろうけど、やっぱり軽めに投げてみたら、ほのかが渋い顔してる。

「本気で投げてっ、てばー！」

そんなこと言われても、ちよつとだけ、強くしてみようか。

「これじゃダメよ。なぎさのっ、ばっかっ！」

なによそれ？あ、そっか。あたし怒らせる気だな。

「あたりまえで、しょっ！」

ほのかに言われたって、気にもならないよ。

「なぎさのっ、筋肉オンナっっ！」

ん、ちよつとは気になるけどさ。

「それはラクロスに、必要なのっ！」

ふふ、ん、どつよ。

ほのかが、ボールをクロスの中でお手玉しながら、ちよつと考え込んでる。ちよつとは慣れてきたのか

な？

「しょうがないわねえ、好きな人のこと、バラシ

ちやうわ、よっ？」

え？

ほのかが、思いきり息すった。

「みなさ、ん。美墨なぎささんはですねっ」

ちよ、ちよつと。「はっはっはっはっはっはっ！！」

「こんのあ、ほのかっ！！」

あ、いけない。本気で投げちゃった！

「ほのか、危な、！」

すごい勢いのボールが、ほのかの胸に向かってまっ

すぐ、！！

ぼふっ！！

え？

え？

「ふう。やっぱり、ちよつとしびれるわね」

ほのかが、クロス持ってた手を片方つつ放して、ぶらぶら振ってる。まさか、ほんとに？

「ほ、ほのか？ いまの、受け止めたの!？」

声が上がってっちゃう。だっていまの、ほとんどあたしの全力 シュート並みなんだよ?」

「見てたでしょ? ほら」

クロスを高く上げたら、ころん、とボールが転がってきた。ほんとに、あれ、受け止めたんだ。

「ど、どうやって!？」

ありえない ほのかって、運動も天才なの?」

なんかもう、ぼーっとしちゃうよ。ああ、ほのかがだんだん近づいてくる。くすくす笑いのほのか。

「だってなぎさ、さっきから同じところに投げてきてるじゃない?」

同じどこ? そりゃ、パス練習で、試合じゃな

いんだもん。当たり前よ。

「だからね、そこにクロス置いて、あとはしっかり握ってただけ。そうしたら、きつと取れると思ったの」

ちよ、ちよっと待って!

「でも、いまわざと怒らせたじゃないの。もしそれ

で外しちゃったら」

「なぎさだもの。絶対、外すわけないわ♡」

にこにこ笑いながら、あたしの目を見るよ。

遠くで、あの子があたしたち見てる。手に持ったメガホン落としちゃって、あたしよりもっとぼーっ

としてるな。でも、もうなんとも思えないわ。

ああ、力が抜ける。 よかったあ、外さなくて。

\*\*\*\*\*

なぎさを部屋に送ってから、着がえ終わるまでわたしはその前に立っていることにした。

あの子はわたしたちの後について来たけど、いまはわたしの前でぼあっとしてる。突入はしないと思うけど

「雪城先輩は、なぎさ先輩とつきあい長いんですか?」

まだしびれてる手を振って治してたら、突然あの

子が口を開いた。さっきの、一応効果はあったみたいね。『雪城先輩』に格上げになってるし。

「いいえ？ まだ半年くらいよ？」

口に出したら、ちよつと顔がほころんじやう。

ふつうの半年じゃなかったものね。

「そんな そんな時間で、なぎさ先輩がわかつちやうんですか!？」

「何もわからないわよ？」

ふふ。ハトが豆鉄砲食らった、って、こういう顔のこと言うのね。なんだか、にこにこしちゃうわ。

「わたしはね、『何もわかってない』っていうことをわかつてるのよ。

だから、教えてもらうの。何をしたいのか、何がほしいのか。なぎさは、みんな教えてくれてるわ。わたしはただ、それに<sup>こた</sup>応えているだけ」

「それだけで？」

わたしは、ちよつと考えてから首を振った。

あの子の目が、ちよつと変わってきてたから。ひよっ

とすると

「わたしだって、なぎさに教えているのよ。何がしたいのか、何がほしいのか、ね♡」

もちろん、いつも応えてくれる、なんて思っちゃいけないわ。でも、教えもしないで応えてもらおうなんて、もっとダメよ。わたしは、そう思うの」

ちゃんと、考えてるみたい。うん、これなら、大丈夫かも。

「あなたは、なぎさのシュートが好きなのよね？」

わたしは、思い切って言ってみた。

「わたしは、なぎさがボール受けるところが好き。まるで、クロスがわたでできてるみたいに、ぶんわり受けてるのよ♡」

そう、今はまだ威張りんほでも、ちゃんと聞いて、ちゃんと考えられる子なら、きつと

「ほくにも、できるのかな？」

きつと、なぎさの力になるはずだから。

\*\*\*\*\*

夏休みが終わって、何日目の朝。

あたしは、グラウンドの脇を走ってた。ああ、まだまだ暑いってのに、もう！

「おはよう。 どうしたの、そんな息切らせて  
ああ、ほのかか。ふう。」

「なあに、また追いかけてるの？ あの子、正式入部したんじゃないの？」

「したよ。で、基礎練習からやらせてるんだけどさあ どこで聞いたんだか、今度はあたしに、ボールの受け方教える、ってうるさくって」

基礎練習には違いはないけど、なんで、またあたしなんだろ。ああ、部のみんなも、あたしを教育係にしてるしなあ。

「ふうん」

ほのかってば、気のない返事だよ。まったく、あなたは何か言ったから入部したらしいのに。

「なんか、前と状況が変わってないような気がするよあ」

思いつきりため息ついたら、笑い声が聞こえた。吹き出しそうな顔のほのかか、ふふふ、って

ああっ！

「ほのか！ ボールの受け方のこと言ったの、あんたねっ!？」

「ふふ。もうラククロス部の子なんでしょ？ ちゃんと教えてあげてね、なぎさ♡」

ほのかのこの顔、ってことは——まったく、これじゃあ怒るに怒れない あっっ！もうっ!!

「ありえなくいつっ!!」

—おしまい—